



「万国新聞紙」初集 国立国会図書館蔵

第十八号からは「アメリカ史略」として、アメリカの歴史を省述するとともに、「世界開闢かいびやくのあらまし」と題して、創世紀の内容を紹介している。ともに連載であった。いうまでもなくアメリカ史は、ヒコ在米中に得た知識にもとづくものであり、創世紀の訳述はカトリック信者として、聖書を取上げたものであった。キリシタン時代を別とすれば、これは最初の日本文聖書ということができよう。

こうして『海外新聞』は、慶応二年（一八六六）十月まで、二十六号を数えた。しかし記事の評判が高い割りには、購読者がふえなかつた。まず値段が高かつた。一部につき五百文、一年分では一兩二百匁である。当時の物価から見れば、すこぶる高価であつた。そこで購入せずに、記事を筆写する者が少なくなかつた。筆写された海外新聞が、今日でも各地に残っている。さらにヒコ自身が自伝で述べているように「日本の民衆は、その新聞を読みたがってはいるが、どうも当時の政府と法律のせいで、予約購読したり、買つたりするのを恐れていたらしい。そこで、やむを得ず、大部分をただでやる始末であつた。

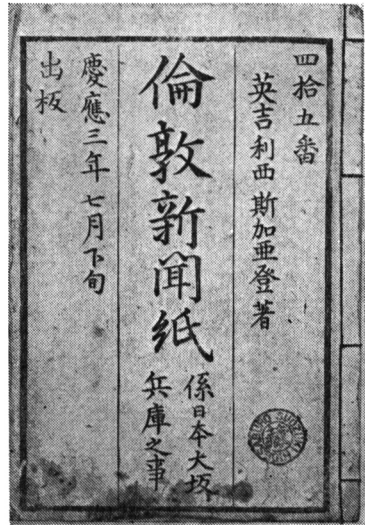
定期購読者はわずかに二名であつたという。

ヒコの苦心にもかかわらず、横浜で発刊された日本最初の新聞は、二十六号で終りを告げた。そしてヒコ自身も横浜を去つたのである。

維新前後の新聞

ヒコの『海外新聞』が廃刊されてから三か月の後、すなわち慶応三年（一八六七）には、新しい

邦字新聞『万国新聞紙』が発刊された。横浜のイギリス領事館にいた宣教師ベイリー B. M. Bailey の編集によるものであり、発行所は横浜居留地の百六十八番であつた。明治二年（一八六九）五月まで発行は



倫敦新聞紙

国立国会図書館蔵

つづけられたが、内容はすこぶる充実し、経営も順調だったようである。

凡例に「此新聞ハ日本ノ諸君子ニ万国ノ事情ヲ知ラシメン為ニ編成」すると述べ、ヒコの新聞と同じように、海外ニュースの紹介を主体としていた。これとともに「日本国」のニュースも取入れ、第五集（慶應三年六月刊）以後には、横浜のニュースも散見する。さらに「外国諸物価相場」をかかげ、広告にも相当のスペースを割いた。広告の

なかには「英国教師ペーリー先生、日本貴公子の英学小志ある者に教授せんと欲す、先生、子弟教育に熱憤せり……」と、みずからの宣伝も試みている。

慶應三年七月には、横浜で『倫敦新聞紙』が発刊されている。居留地四十五番「英吉利西斯加亞登著」となっているが、この発行者がどのような人物であるのか、明らかでない。ロンドンで発行された新聞を訳出したもので、日付も「英国の月日」に拠っている。初号が現存し、その記事によれば、この後も月刊として発行する旨を述べているが、果して何号までつづいたものか、これまた確認することはできない。

ところで『ヘラルド』に協力したブラックは、慶應三年に社主ハンサードが死去するに及んで同社を去り、十月十二日には日刊新聞（夕刊）『The Japan Gazette』を発刊した。『ガゼット』は、さきの『ヘラルド』や『メイル』と並んで、日本における三大外字新聞として重きをなしたが、一九三三（大正十二）年の関東大震災にあって廃刊した。

この『ガゼット』を訳出したと考えられるものが、慶應四年（一八六八）五月にされた発刊された『外国新聞』である。第



「外国新聞」第1号
 国立国会図書館蔵

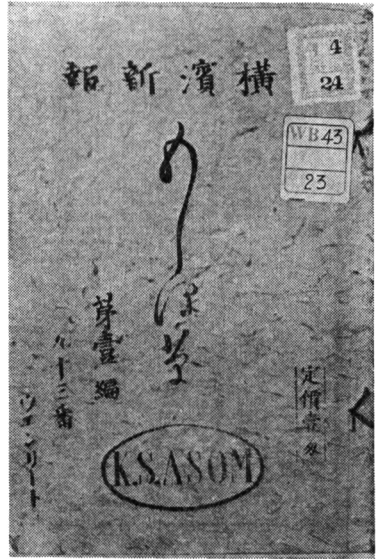
一号から第三号までの存在が確認されているが、発行者や発行所は明らかでない。第一号の巻頭には「横浜新聞抄訳」と記しているが、この横浜新聞とは、おそらく『ガゼット』をさしているのであろう。第二号および第三号には「ガゼット新聞抄訳」と明記されている。

すでに幕府は倒れ、江戸も開城となつて、江戸や横浜は新政府の制圧するところとなつた。江戸でも、このころにはつぎつぎに新聞が誕生しているが、多くは佐幕の立場をとつて、新政府は新聞の弾圧に乗り出すとともに、六月八日には太政官布告を発して、新聞の発行を許可制とした。こうして江戸における佐幕派の新聞は、ことごとく姿を消したのである。

そのような時期に、横浜の居留地で発刊されたのが『横浜新報もしほ草』であつた。アメリカ人ヴァン・リードの発行によるものであり、発行者はリードの居所である居留地九十三番であつた。慶応四年閏四月十一日（六月十一日）に第一帙が発刊され、この年の間は月に三回ないし六回の発行をつづけた。

江戸の諸新聞が発行を禁止されたなかにあつて、『もしほ草』は外国人の経営であつたために、続刊することができたわけである。主として編集に當つたのは、さきに『海外新聞』においてヒコに協力した岸田吟香であつた。その発刊に當つては、次のように述べている。

……此度の新聞紙ハ日本国内の時々のとりきたハ勿論、アメリカ、フランス、イギリス、支那の上海香港より来る新報ハ即日に翻訳して出すべし、且月の内に十度の余も出版すべし、それゆゑ諸色の相場をはじめ世間の奇事珍談、ふるくさき事をかきのせる



「横浜新報もしほ草」第1号
国立国会図書館蔵

事なし、また確実なる説を採りとめて決して浮説をのせず……
 そして記事の内容は、国内ニュースをひろく求めて掲載し、読者の期待にこたえた。たとえば第二編において、浪華新聞、諸州雑報、外国新聞、横浜近事などの項目を立てているところを見ても、編集の意欲がうかがわれるであろう。旧幕府側の動きも、くわしく扱った。さらに刊行者の意見を開陳する場合もあった。

……凡そ国内乱ある時ハ、雙方共種々の浮説あることなれば、其報告の信偽弁ずること、兎てもならぬ筈のことなりといへども、余が主意ハ確説実事ならではのせざるつもりなり、……一政府を立て外国人とます／＼親睦を厚くせずんば、日本ハ将に大なる不幸に及ぼんとす、衆人宜しく早くこれを悟らば、大にしてハ万国の人民と相和し、小にしては国内強国の民人と相和せんこと、是余の素より希望する所なり

(第十六篇)

こうして『もしほ草』は好調のうちに明治二年をむかえたが、この年には発行の回数も半月に一回、ないしは三か月に一回となる。そして明治三年には一月と三月に発行したのみで、廃刊となった。この年、横浜では最初の日刊新聞が発行される。

三 キリスト教の伝来

布教の基礎

日本におけるキリスト教布教の基礎は、日米修好通商条約の第八条によってきづかれた。この条約は、安政五年戊午六月十九日（一八五八年七月二十九日）に、江戸において調印され、万延元年庚申四月三日（一八六〇年五月二十二日）ワシントンにおいて批准交換された。その第八条とは、次のとおりである。

日本に在る亜米利加人 自ら其国の宗法を念し 礼拝堂を居留場の内に置も 障りなし 並に其建物を破壊し 亜米利加人宗法を自ら念するを妨る事なし 亜米利加人 日本人の堂宮を毀傷する事なく 又決して日本神仏の礼拝を妨げ 神体 仏像を毀る事あるへからず

双方の人民 互に宗旨に付ての争論あるへからず 日本長崎役所に於て 踏絵の仕来は既に廃せり
この条項は、ハリスの日記によれば、それがいれられるという希望を、ほとんどもたずに挿入しておいたものであって、彼は、それが承認されたときに、驚き、そして喜んだのであった。ついで、同年旧暦七月十日にオランダ、同月十一日にロシア、同十八日にイギリス、同年九月三日にフランスと、それぞれ同様の条約が調印された。

この第八条の条文は、在日アメリカ人の信仰の自由を認めたものであって、いまだ日本人に対する伝道は許されていなかったし、礼拝堂の設立も居留地内に限られているものであった。しかし、この条文によって、いまかいまかと待機していた欧米人宣教師が、日本に来て、居留地という限定された地域内ではあるが、そこで公然と礼拝をおこなうようになった。この第八条は、翌安政六年六月五日（一八五九年七月四日）、幕府が開港にさいして、神奈川居留地を定めることによって実施されるこ

とになった。

日米通商条約の締結に努力したアメリカ総領事ハリスは、熱心な聖公会の信徒であった。彼にとつては異教である日本に來ても、主日を厳守し、みずから祈禱書によって礼拝を守るのを習慣としていた。それ故に、彼は、この条文中に、外国人が居留地に会堂を建設し、キリスト教礼拝をおこなえる条項をいれることを強く要求し、それが実現されたのである。調印を終えたハリスは、八月一日の日曜日、下田港に碇泊していた米艦ボウハットン号とミシシッピー号両艦の士官水兵を玉泉寺の自宅に招いて、厳かに礼拝を捧げた。こうして、仏像がとり除かれた寺院において、日本における最初のプロテスタント礼拝がおこなわれた。このとき礼拝に出席したアメリカ海軍将校の一人が故国に書き送った文書は、一八五九年二月の『ザ・ニューヨークジャーナル・オブ・コンマース』および同年三月の『スピリット・オブ・ミッションズ』誌上に公表されている。

プロテスタント伝道

この通商条約締結よりさき、前年の一八五七年十月三日、函館にいた合衆国軍艦ポーツマス号に乘組んでいたある士官が、中国の上海にいる宣教師にあてて、日本に宣教師を派遣するようにという手紙を送っている。そのなかで次のようなことを記している。宣教師が日本に來て、何の手段を講ずることもなく、むやみに事業に突進することは大害を招き、その事業を水泡に帰するだけではなく、総領事の政策の妨げともなるであろう。宣教師は、日本において、英語研究を切望する人々を発見するでしようし、学校も、すみやかに開設することができるでしようから、眞の福音に関しては、これを伝えるのに、蛇のようにかしこくなければいけない。

この手紙は、上海のウィリアム・J・ブーン主教によって、機関紙に発表され、米国の聖公会内部に、日本に対する関心と伝道の熱意とを、よび起したものであり、重要な意味をもっていたといえる。このほかに、中国在留の宣教師で、一八五八(安政五)年に長崎に來たことのあるE・W・サイルとS・W・ウィリアムズの伝道協会への呼びかけもあった。ウィリアムズ

リギンスは、サイルが結んでおいた長崎奉行との約束にもとづき、八名の通詞に英語を教えることになり、崇福寺内に一屋を無料で提供された。リギンスは、英語教授とならんで、在中国宣教師による漢文の西洋史・地理および科学の書物を頒布して、西洋および科学に関する知識を与えらるとともに、キリスト教的精神を普及し、邪崇門という誤解を、とり除くよう努力した（『立教学院百年史』による）。

カトリック伝道

フランスに対する開港は、安政六年七月十七日（一八五九年八月十六日）であった。そして、フランス人宣教師フューレが長崎に来たのが、文久三年十二月十四日、（一八六三年一月二十二日）である。ローマ法王庁が日本宣教をフランスのパリー外国宣教会に委託したのは、弘化三年（一八六四）のことである。そして、すでに琉球の那覇に来ていたフォルカード神父を日本教区長に任命した。このパリー外国宣教会は、東洋の拠点のマカオにおいていたが、のち、香港にすずめていた。フォルカード師は、琉球で言語風俗に慣れながら、日本布教の準備をしていたのである。しかし、健康を害してフランスに帰ったので、そのあとに琉球に派遣されたのが、ジラール、フューレ、ムニクヴ、メルメの四神父であった。こうしていろいろうちに、安政五年、開港条約がフランスとの間に締結され、函館に領事館が開設された。翌六年、主任司祭メルメ師が函館に到着したが滞在四年のうちに、幕臣栗本鋤雲らの名士と親交を結び、語学の交換教授もあり、英仏和辞典やアイヌ語辞典を編み、博学の人として知られた。函館奉行竹内下野守も、メルメ師を厚く待遇した。しかし攘夷論がたかまってくると、奉行の態度も変わり、メルメ師は失意のうちにフランスへ帰った。その後、函館に再度宣教師が来るのは、四年後の慶応三年（一八六七）のことである。

この間、ジラール神父は、日本教区長に任命され、安政六年（一八五九）フランス総領事館付司祭兼通訳として江戸に着任した。同神父の計画のもとに、横浜居留地八十番地（現在 山下町八十番地）に、文久二年十二月十八日（一八六二年一月十二日）

は次のようなことを記している。

伝道のもっとも有望な開始方法は、長崎または江戸に一宣教師が居住して、日本語を学ぶためにできる限りの便宜を与えられるという諒解のもとに、日本の青年に英語を教えることである。もし、伝道が、思慮のある忍耐のある人物によって開始されるならば、それは、英語の会話・作文を教授することを第一的とするのがよい。そして、その宣教師の伴侶として一医師が加えられ、一般の日本人を無料で診察しながら、特定の人に薬学と外科手術とを教えること。この宣教師と医師と兩人とも、靈魂を深く愛して人をキリスト教に導くことに熱心ならば、かならず成功するだろう。

また、ウィリアムズは、米国の諸伝道協会のいずれかが、明年の条約実施期をまっぴらに実施に着手することを希望し、日本に宣教するために選ばれる人々は、忍耐・温和・倦むことのない親切と学問的傾向のある人でなければならないといっている。

こうして、サイルとウィリアムズらは、米国の聖公会・長老教会・改革教会の伝道局にあてて、日本に宣教師を派遣するよう訴えた手紙を送ったのである。

ここに、米国の三伝道協会は、いよいよ、日本伝道に着手すべき時機が到来したという確信をもち、この勧告に従って、翌年に、もつとも敬虔で忍耐心のある福音の使者を日本に派遣した。

米国聖公会の伝道局は、日本における第一の伝道本拠地を長崎と定め、すでに中国在住宣教師がおこなっている宣教方法を採用することとし、中国伝道に属していたジョン・リギンズとC・M・ウィリアムズの二人を、日本宣教師に任命した。こうして、リギンズは、安政六年、西暦一八五九年五月二日に、ウィリアムズは、同じ年の七月二十九日に、長崎に到着した。さらにH・E・シュミット宣教師が一年余遅れて長崎に来て、施療事業を開始した。

開国後最初のカトリック教会堂の献堂式がおこなわれたが、このことは、のちに記すことにしたい。

長崎の大浦に、潜伏キリシタン発見の願いをこめて、天主堂が建立されたのは、翌慶応元年（一八六五）の初めである。献堂式は、西暦二月十九日におこなわれ、日本二十六聖人殉教者聖堂と命名された。この天主堂の建立を機会に、西暦三月十七日、潜伏キリシタンが天主堂に現われたのである。いわゆる「キリシタンの発見」である。

横浜における天主堂の建立が、旧キリシタンの発見とは関係なかったのに対して、長崎における場合は、最初から潜伏キリシタン発見の願いがこめられていたのであり、そこに浦上四番くずれの原因がひそんでいた。

ハリストス正教会

幕府が、ロシアの使節プチャーチンとの修好通商条約に調印したが、安政五年七月十一日（一八五八年八月十九日）で、神奈川・長崎・函館の三港を開いたのは、翌六年六月二日（一八五九年七月一日）であった。

そして、ロシア領事兼外交代表ゴシケウイチが着任し函館に駐在したのは、同六年八月のことであった。つけ加えておけば、英国総領事兼外交代表オールコックが高輪東禅寺に入ったのが、同六年六月のこと、米国公使ハリスが仮公使館麻布善福寺に入ったのが、同六年六月八日、フランス総領事兼外交代表ド・ベルクールが総領事館麻布濟海寺に入ったのが、同六年八月のことである。外交代表を箱館においたのは、ロシアだけであった。このロシア領事館には聖堂が付属していて、イオアン・マアホフという司祭が領事館付司祭として派遣されていた。このマアホフは、一年たらずのうちに、病気で帰国したが、その短い滞在のうちに、「ロシアアリーブカ」（ロシア語いろはの意味）という露日用語字典を著わしている。この司祭の後任として来たのが、ニコライ師で、文久元年四月二十四日（一八六一一年六月二日）に函館に到着した。

当時、函館には、蝦夷警備のために、津軽、南部両藩の兵が駐留したほか、この北海の要地に注目した志士たち、主として

東北出身の有為の人材が集まってきた。浪人、医師、商人、神官、僧侶など、あらゆる階層の人々がおり、長崎と同様に活況を呈していた。

ニコライ師は、キリシタン禁教下にあつて伝道ができない時期にあつて、日本語の研究からはじめた。日本史研究、儒教、神道、仏教など東洋の宗教や学問を研究し、日本美術までも学んだ。ニコライ師の日本語および東洋文化研究は、大体七年かかった。日本語を大体マスターした次の段階で、彼は、教会関係の教書や、奉神礼書（正教会の祈禱に使用する経文書）のあるものを翻訳しはじめている。

明治元年、まだ信者が一人もいないときに、布教の方針を建て、「伝道規則」を制定し、これを日本文に改めた。日本における正教会最初の洗礼は、明治元年（一八六八年四月）におこなわれた。受洗者は、沢辺琢磨・酒井篤礼・浦野大蔵の三名であった。

ニコライ師は、明治二年のはじめに一時帰国し、同四年（一八七二年二月）函館に帰着したが、掌院という職に昇り、日本における伝道会社の首長に任ぜられていた。伝道が最初に成功したのは仙台地方であるが、ニコライ師は、ロシアから修道司祭アナトリイ師が函館に到着すると、函館の伝道をアナトリイ師に任せて、横浜に向つた。明治五年一月のことであった。このころ横浜では、すでにプロテスタント各派の宣教師は、英語教授や医療活動に従事しており、カトリックの天主堂は建立されていた。

しかし、ニコライ師の目ざす所は、東京であつた。明治五年九月、今の復活大聖堂（ニコライ堂）の建っている場所に移り、ここを正教伝道と本拠とした。同月二十四日、東京における最初の洗礼がおこなわれた。受洗者は数十名という。

ニコライ師上京以来、日本政府首脳との交際は緊密で、太政大臣三条実美や外務卿副島種臣などはニコライ師を訪問した。

明治五年、ロシアの皇族アレクサンドル公が来日したとき、副島外務卿の依頼により、明治天皇との間に通訳を務めるほどに信頼を得ていた。

こうして、東京の布教活動は活況を呈し、東海地方からさらに京阪地方にまで布教をはじめるといった。一八七四（明治七年）五月、はじめて布教会議を東京に開いた。これが日本正教会第一回公会である。